

今朝から、ベタニヤの地の三兄弟の起きた出来事から学びます。

1. ラザロが病気であるとの報 (11～16節)

①ベタニヤの三兄弟 (1～2)「さて、ある人が病気にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタニヤの人であった。このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。」ベタニヤはエルサレムから3キロほどの所にある村でした。そこにある家族が住んでいました。三人兄弟でした。マルタとマリヤ姉妹と男兄弟であるラザロでした。イエス・キリストはエルサレムに来られる時には、よくこの家族の所に立ち寄られました。姉マルタと妹マリヤにまつわる記事はいくつかあります。姉マルタはよく働く女性でした。一方マリヤは静かに御言葉に聞くことが好きでした(ルカ10:38以下参照)。また、マリヤはこの記事にも伝えられているように、キリストの受難前に、高価な香油を主の足に流し、髪の毛で拭ったことがありました(12章参照)。この姉妹にはラザロという兄弟がいました。ところが、そのラザロが重篤な病気になってしまったのです。

②神の栄光のため (3～4)「そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。『主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。』イエスはこれを聞いて、言われた。『この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。』ラザロの病状が深刻なことを受けて、マルタとマリヤは、有体に言えば、「イエス様、ラザロが大変です。来てください！」と使いを送って頼んだのです。すると主は、「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のため。神の子(イエス・キリスト)がそれによって栄光を受けるためです」と言われました。このことを通して、イエスが神から来た方であることが明らかにされる時となることを述べておられるのです。

③二日、とどまられ (5～6)「イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。」イエスがマルタ、マリヤ、ラザロを愛しておられたので、ラザロの病気を聞いたときにも、そこにとどまられたというのはどういうわけでしょう。普通なら、愛しておられるので、即座に行かれたということになるはずですが、それは、ラザロの病気を通して、主のご栄光が現れようとしているので、主はあえてとどまられたと読むことができます。

2. イエス・キリストのご覚悟 (7～10節)



①再度ユダヤに (7)「その後、イエスは、『もう一度ユダヤに行こう。』と弟子達に言われた。」イエス様が父なる神と一つであることを述べられたこと (10:30) を受けて、ユダヤ人たちはイエスを石打ちにしようと試みたのです。そこで、イエスと弟子達はヨルダン川の東側に避難されておられたのです。しかし、主はラザロの報を受け、ユダヤに行くと言えられたのです。

②石打ちにされるかも (8) **弟子たちはイエスに言った。『先生。たった今、ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。』**すると弟子達は、思いとどまるように勧めます。今行けば、血気にはやっているユダヤ人に何をされるかわかりません。石打ちにされるかもしれないからと願ったのです。

③光がうちにあれば (9~10)「**イエスは答えられた。『昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまずくことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまずきます。光がその人のうちにないからです。』**主と共に歩み、仰いでいる間は、躓くことはないのです。しかし、主を見失い夜に歩くようになれば躓いてしまうのです。光である主がその人のうちにないから、と主は答えられました。十字架までに、いささかの猶予があることも語っているとも思われます。

3. ラザロの死のことを (11~16 節)

①ラザロは眠っている (11~12)「**イエスは、このように話され、それから弟子達に言われた。『わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。そこで、弟子達はイエスに言った。『主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。』**イエスは弟子達に、ユダヤに行く理由として、友であるラザロが眠っているのだから、その眠りから覚ましに行くのだと言われます。ところが弟子達は、単に眠っているのだと理解し、それならばそんなにあわてなくても、彼は助かるでしょうと、覚りのない答えをするのでした。

②ラザロは死んだ (13~15)「**しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたと思った。そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。『ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。』**イエスはラザロが死んだことを言われたのです。一方の弟子達はイエスの言葉から、単に眠っていると勘違いしました。そこで、主ははっきりと言われました。「ラザロは死んだのです」。このことについて、主は弟子達が主を本当の意味で信じるために、そこに居合わせなくて良かった

と述べています。ここまでキリストを共にやってきても、まだイエスがキリストであることを弟子達はよくわかっていなかったからです。

③トマス (16)「**そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。『私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。』**トマスは、この書に何回か出てきます。印象的なのは復活の主をすぐに信じなかったことでしょうか。今ここでは、イエスが危険を覚悟のうで行かれると聞き、キリストと苦難をともにするという覚悟を述べたのでした。

《結論》

ヨハネの福音書 11 章には、ベタニヤに生活する兄弟たちに生じた出来事

が記されます。主イエスはエルサレムに行く時に、ベタニヤに行き、この兄弟たちの家によく立ち寄られたのです。ところが、その兄弟のうちの男兄弟ラザロが病気で命を落としてしまうのです。今朝の記事はその序盤ですから、まだイエスの弟子達は、ラザロが死んだということについて、把握できずに、正しく受け止めることができていません。次回の聖書箇所では、「わたしは～です」(エゴーエイミ)と主が言われた部分が出てくるわけですが、そのことをしっかりと理解するためにも、章の冒頭から読んでおくことが必要なのです。

今朝の聖書箇所のなかに、イエス・キリストの重要なお言葉があって、それを読んでおかないと「わたしは、よみがえりです。いのちです」と 25 節で言われた御言葉を理解できないからです。

そこですが、今朝は特に 4 節のお言葉に注目したいのです。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」とイエスさまは言われています。9 章で盲人が盲目にうまれついた理由について、イエスは「神のわざがこの人に現れるためです」(9:3)と言われています。この二つの御言葉に共通していることは、イエス・キリストは、それらの出来事を通して、神のご存在が証しされ、キリストがどなたであるかを明確にしようとされているということです。

ラザロが瀕死の病気であるという知らせを受けた時に、すぐにラザロのところにでかけられなかったのも、キリストはご自分が誰であるかを明らかにされ、そのことで神の栄光が現わされていくことを大切にされたからでしょう。つまり、病気がなおって良かった、命が助かって良かったということは、人間にとっては極めて重要なことです。主イエスも人間の思いを理解した上で、多くの弱った者や病を持つ者たちを、慰め、いやしてこられました。しかし、それだけでは不十分であることをイエス・キリストは認めておられたのです。

やがて、イエス・キリストは十字架上で死に、復活するとい

う福音の核心へと進まれています。そのためにも、ここにおいて、主イエス・キリストは十字架と復活の福音に、弟子を始め、人々が心に向けていくようにお導きくださっているのです。主は、人間に栄光がもたらされる方向でなく、神に栄光が帰されていくことを、徹底的に教えようとされているのです。

みなさん、人情は大切です。神の愛（アガペー）にも、人情も包含されているでしょう。しかし、神の愛は人間の思いをはるかに越えた、大いなるものです。人間の考えのなかに、主なる神を押し込んでしまっはならないのです。大いなる神の大いなるみわざが現わされ、キリストに大いなる栄光がもたらされていくことが、きわめて重要なのです。キリストを信じるということは、イエス・キリストがまことの神であり、救い主であることをはっきりと認めていくことです。今朝、私たちはベタニヤ村におきた出来事の序盤を通して、ともすると、人間のレベルに神を落とし込みやすい心を戒め、神にこそ栄光がもたらされるために、キリストだけが主であることを明確に告白していきましょう。